東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

日本とアメリカの学習指導についての考察：現地校教師との情報交換を通して

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2022-05-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 野里,宏
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173978

日本とアメリカの学習指導についての考察

―― 現地校教師との情報交換を通して ――

前ニューヨーク日本人学校　教諭
岩手県久慈市立侍浜中学校　教諭　野　里　　宏

キーワード：ニューヨーク日本人学校、アメリカ、現地校、数学、Lesson Study Open House

１．はじめに

派遣していただいていた３年間で、生徒の学校間交流引率や、現地校視察の際、アメリカ現地校の授業を参観する機会を何度か得た。感じたことの第１は、「できる」だけではなく、できたことを「伝える」ことに重きを置いていることである。それぞれが自由なスタイルで考え、自由に発表している姿に驚いた。それが最善とは、感じなかったが、謙虚に学ぶべきことはあると思った。

２．Lesson Study Open House（授業公開研修会）について

(1) 概要

ニューヨーク日本人学校では、毎年１回、アメリカ人の先生方を招いて、Lesson Study Open House（授業公開研修会）を行っている。

幸い、中等部を代表して２度授業公開させていただき、様々な意見を得ることができた。全体的に、日本の系統的学習指導に対して高い評価を得ることができ、改めて、日本の教育水準の高さを実感した。

(2) 数学授業についての研究協議

①中等部の研究

中等部では、「生徒の意欲を引き出し、力を伸ばす教材・手立ての工夫」という副題を設定し、数学に限らず、全ての教科で研究を進めてきた。

前年度は、「生徒の思いや考えをつかむ、まとめ・評価の工夫」として、診断的評価や形成的評価の工夫によって指導の質を高める研究を行ってきた。今年度はこれらを継続し、生徒の理解度や関心を見取るとともに、それらを高め、力を伸ばす教材・手立ての工夫に重点を置いて研究を進めた。

②授業者自評

本時は多面体を作製できる教具を使って授業を行った。コンピュータを活用した指導も検討したが、立体を自分で作製し、実際に触れられる教具に勝るものはないと考えたからである。生徒たちに説明させる場面では、数学的な専門用語を活用して説明できるようになってきた。１年生から系統的、段階的に教えてきた成果だと思う。１年生では箱の形。４年生から体積。５年生で円柱や球。７年生で多面体。９年生は三平方の定理を使って、面積や体積を求める。これらの系統性についても協議したい。

③協議（Ｑ＆Ａ）

Ｑ：この教具を使うのは何回目か。また、初めての使用した時はどんな様子だったか。

Ａ：本時で３回目。初めは、自由に立体を作るように言ったので、とても盛り上がって楽しそうに立体を作製した。さらに、作った後で面の数などを調べさせ、オイラーの多面体定理まで理解させた。

Ｑ：先生の表情がポジティブ。白だけでなく、いろんな色のチョークを使って板書しているのがいい。黒板の書き方のリソースはあるか。

Ａ：初等部と中等部で異なる点もある。自分自身、これが生徒にとってわかりやすいと考えて本時のように行っている。

Ｑ：面や辺の数を速く数えるやりかたを、自分たちで考える生徒はいたか。

A：「単純に数えてみよう」と発問して、その法則を見つけられる生徒はいなかったが、「表にまとめてその規則性からルールはないか」と問いかけると、気づく生徒がいた。

Q：今日の授業で何人ぐらいが理解できたか。

A：正多面体が5個しかないということは全員理解できた。しかし、本当のねらいは、なぜ5個しかないかを説明する力を付けさせることだった。それはできない生徒がいると感じる。

Q：一人ひとりの成績を毎回つけるのか。観察だけで評価するのか。

A：評価のポイントは、説明や班での話し合いや小テストでも行う。しかし、毎時間の評価とまではいかないのが現状である。

Q：宿題はあるのか。

A：問題集があるのでこれを自主的に活用させている。1時間の授業で1ページ進められるようにできている。

Q：日本に帰ったらすぐに同じ内容を学べるのか。

A：日本に戻ったらすぐに授業に入れる。こちらでは多少進度を早くしているので、日本の学校に転校しても、遅れていることはないと思う。

Q：2年前も来た。アメリカであまり聞かれない言葉として、「楽しみ」とか「美しさ」という言葉を使うが、以前からよく使用する言葉なのか。

A：以前から使用していた。数学においては1番楽しいのはわかること。新しいことに気がついたり、そうだったのかと思ったりすることだと考えている。

Q：楽しいということが前面に出ていて、ガイドラインにも書かれていることが素晴らしい。違う学校の生徒たちには、本時の指導内容をどうやって指導するのか。

A：その生徒たちの分析をして、得意なことや好きなことを生かすよう、細かく修正していく。

Q：先生の教具の出し方が面白かった。競争させたのも効果的。細かいことも全部自分で考えるのか。

A：そのとおりだが、これまでも様々な指導方法を実践し、お互いに公開し合って、よい指導方法は共有し合うことを日本でやってきたので、多くの先生が考えたと言ってよい。

Q：はじめ、一人ひとり単独で作業していたが、だんだんグループでの学習となった。意図したことか。

A：1人で作業する時間もつくりたかったが、正多面体が何種類あるのかを考えるので、「同じ正多面体を作らないように」という発言によって、グループで相談させるように誘導した。

Q：1年間のカリキュラムはどのようにつくるのか。

A：基本的に、自分たちで年度の初めにつくっている。

Q：日本の教育現場で、家庭の経済状態が原因で成績が変わることはあるか。

A：それも1つの原因になるかもしれない。

3．まとめ

授業研究会では、「楽しい」学びや、図形の「美しさ」など、知識だけでなく心情を豊かにする教育について現地校の先生方に驚かれた。また、「家庭の経済状態が原因で成績が変わることはあるか」「数学は一般的に何時間目に学習するのが効果的か」「アメリカの子供たちに本時を指導する場合どのような授業展開が考えられるか」など、日本の授業研究会では話題にならない興味深い質問が出された。

さて、本研究会及び、現地校視察を通して感じたことは、アメリカと日本の教育の大きな相違点があるということである。極端な表現になるが、アメリカではより優秀な一人を生み出す教育をしている。年齢によって学習内容を決めることはない。学校によっても学ぶことは定まっておらず、教科担任が得意とする内容を深く学ばせている。それに対して日本では、基礎的・基本的な内容を理解すること大切にし、家庭の経済状態にかかわらず全員がどこの学校に行っても同じ内容を学ぶことができる。教師は、みんなに学習意欲をもたせるために、興味がわくような教具を開発したり、図形の美しさによって関心を高めながら授業をしている。そして、平均点の向

上を一つの目標としている。帰国して第一に指導を受けたことが、学習定着度状況調査についてであった。

日本では、楽しく学ぶ必要があり、アメリカでは楽しさは重要ではないのである。そう考えてみると、私の授業を見た現地校の先生方は、驚きと違和感を感じたことと思う。

日米どちらの教育が優れているかは分からないが、日本人の生徒が、生き生きと楽しそうに学ぶ姿を披露できたことは誇りであり、この日本の教育で世界で活躍する人材を育みたいと改めて感じた。